「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録２５周年記念セミナー

「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」開催記録

４．瓦が語る法隆寺の歴史

- 開催日時・場所

・平成３１年１月１９日（土曜日）

午後１時３０分～午後３時（開場：午後１時）

・日比谷図書文化館　４階　Studio＋

（東京都千代田区日比谷公園１－４）

- 講師

デザイナー　坪岡　徹　氏

斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課

参事・考古学技師　平田　政彦　氏

- 司会進行

斑鳩町観光キャンペーン大使　藤江　祐太

- 坪岡氏と平田技師による対談のようす

平成 30 年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化遺産総合活用推進事業）

13：00		～開場～
13：20	斑鳩町観光キャンペーン大使 藤江祐太 （以下、藤江）	本日は、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録２５周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。 本日のプログラムは、予定どおりこの後、午後１時３０分に開演いたします。終了予定時刻は午後３時となっております。 開演までのお時間をお借りしまして、本日、参加記念品として、「わたしだけの斑鳩時間」について、ご紹介させていただきます。（資料から出して、聴講者に見せる） 「わたしだけの斑鳩時間」は、斑鳩町の郷土史家・蔭山精一さんの文章とデザイナーの坪岡徹さんのイラストによる、知る人ぞ知る斑鳩の歴史秘話を２話ずつペーパーにまとめたミニガイドで、全30編あります。 本日は、そのなかから、「禁制からみた戦国期の法隆寺」「法隆寺僧の身分・学侶と堂衆」をプレゼントさせていただきました。 開会までのお時間をお借りしまして、斑鳩町まちづくり政策課の佐谷より、パンフレットの紹介をさせていただきます。
	佐谷	みなさま、こんにちは。 お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。 今日は、お天気に恵まれまして、過ごしやすい日となったのではないでしょうか。 さて、本日はさまざまなパンフレットをお配りしておりますが、その中で最近できあがったパンフレットをお持ちいたしましたので、見ていただければと思います。 「るるぶ　奈良斑鳩」というものですが、斑鳩町でのさまざまな体験プログラム、例えばバギー体験や朱印帳づくり体験、豆腐を作る体験などを紹介しております。また、「斑鳩ブランドのおみやげ」と書いてあるページがあります。２０２１年に聖徳太子１４００年御遠忌に迎えます。これにあわせて、ホテル・マルシェ・駐車場の複合施設

		が新しく建つ予定です。その施設に置かれる斑鳩ブランド品の認定を、斑鳩ブランド創造協議会で進められてまいりました。昨年の１１月２日に斑鳩ブランド品の認定が行われ、認定された斑鳩の名物２１品目が掲載されております。 　ぜひ斑鳩町にお越しいただきまして、お買い求めいただければと思います。また、本日はお持ちしておりませんが、来月２月１６日に、日本橋社会教育会館で行います、第５回目のセミナーにおいては、斑鳩ブランド認定品の販売を予定しておりますので、どうぞ楽しみにしてください。 　さらに斑鳩町では、大仏で有名な奈良市と、観光における誘客連携宣言を行っております。本日、「ならり」という、奈良市観光協会のパンフレットもお配りしております。こちらにも、斑鳩ブランド認定品を掲載いただきました。ぜひご覧ください。会場後方には、奈良市の観光パンフレットを設置させていただいております。斑鳩町へお越しの際には、あわせて奈良市にもお立ち寄りいただくというプランもよいのではと思います。 　本日は、誠にありがとうございます。
13：30	藤江	皆様こんにちは。 只今から、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録２５周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」を始めさせていただきます。 　本日、司会進行を務めさせていただきます、斑鳩町観光キャンペーン大使　藤江祐太と申します。どうぞよろしくお願いいたします。 　世界文化遺産・法隆寺のあるまち　斑鳩町は、奈良県の北西部に位置する、古来からの交通の要所です。飛鳥時代、聖徳太子が寺を建てるのにふさわしい土地を探しておられたとき、龍田明神が白髪の老人の姿となって、「ここより東に斑鳩の里がある。そこに寺を建てなさい」というお告げがあり、聖徳太子は斑鳩の里に法隆寺を建立されたと伝えられています。 　また、聖徳太子は、斑鳩の里に「斑鳩宮」「中宮」「岡本宮」「葦

		垣宮（あしがきのみや）」の４つの宮を造営し、一族で暮らしておられました。今なお、斑鳩には、聖徳太子ゆかりの寺社や史跡と、つみかさなる歴史が多く残されています。 　そして、西暦６０７年に法隆寺が建立されてから１４００年、平成５年１２月には、「法隆寺地域の仏教建造物」が、日本ではじめて、姫路城とともに、世界文化遺産に登録されました。 　このセミナーは、世界文化遺産登録２５周年を記念し、文化庁の支援を受けて、開催するものです。 第４回目となります今回のテーマは、「瓦が語る法隆寺の歴史」でございます。 　本日の講師は、デザイナーの　坪岡　徹（つぼおか　とおる）様と、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課　参事で　考古学技師の　平田政彦（ひらた　まさひこ）技師です。 　今回は坪岡様と平田技師による対談をお楽しみいただきたいと思います。それでは、どうぞよろしくお願いいたします。
13：32	坪岡氏	本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。 　坪岡と申します。仕事は、工業デザイナーをしておりまして、製品をデザイン・設計しております。世の中の流行を見ながら、新しい製品を考えております。住んでいる場所は斑鳩町で、新しいものというよりは、古い建物や、昔ながらの風習が残るまちです。しかし、古いものでも、視点を変えて、例えばデザイン的な視点で見ると、ものとして非常によくできていたり、洒落ているなと思うことが多々あります。今日は、そういったところを、みなさんに紹介させていただきながら、斑鳩の魅力をお伝えできればと思っております。 　それでは、お話をさせていただきたいと思います。 　斑鳩でも、法隆寺の周辺は風致地区になっていて、例えば「屋根に瓦を載せないといけない」とか、「派手な色の建物を建ててはいけない」といった規制があります。また高さの規制もありますし、建ぺい率などの制限もあります。家を建てる側からすると厳しい規制ですが、その分、瓦屋根が載った建物のきれいな景色が残っていくのかなと思

		います。 　法隆寺の時の鐘は、今でも毎日鳴っております。８時、１０時、１２時、１４時、１６時の１日に５回、鐘が鳴っております。この鐘は、有名な俳句の「柿食えば　鐘が鳴るなり　法隆寺」の鐘ですが、この俳句は、正岡子規が奈良旅行に来て作られたものだそうですが、実は、盗作ではないかという話があります。正岡子規がこの俳句を作る前に、友人である夏目漱石が、非常によく似た俳句を作っています。それは、「鐘つけば　銀杏ちるなり　建長寺」という俳句です。ずいぶんよく似た句ですよね。正岡子規は、夏目漱石が作ったこの俳句のことを知っていて、しかもこの俳句を気に入っていたということですので、真相はわかりませんが、個人的には真似をしたのではないかと思っています。しかし一方で、斑鳩に住むものとしては、法隆寺という言葉を俳句に入れ込んで、よくぞ世の中に広めてくれたなと思っています。 　そんな鐘の音が聞こえる斑鳩ですが、ときどき散歩をしていると、面白い光景を目撃することがあります。最近の子どもは、スマートフォンやゲーム機を持って、外で友達同士で集まって、対戦ゲームなどをして楽しんでいます。そこで、午後４時になると法隆寺の鐘がゴーンとなります。すると、今までゲームに夢中になっていた子ども達が、その鐘の音を聞いて、「帰らないと！お母さんに怒られる！」と言って、家に帰っていくわけです。そのシーンを見ていると、すごくおかしくて、スマートフォンや最新のゲーム機を持っている子ども達が、お寺の鐘の音を聞いて家に帰っていくというのが、古いのか新しいのかよくわからない光景が、面白おかしいなと思います。みなさんが斑鳩にお越しの際は、レトロな環境の中で生きる斑鳩の子どもたちに、ぜひ遭遇してもらいたいなと思います。そして、世界遺産法隆寺の壁を挟んですぐ隣には、住民の日常生活があるわけです。斑鳩の子ども達の面白おかしな光景は、そういった環境ならではのことかなと思っております。法隆寺の周辺で虫取りというのも日常の光景ですし、私の息子は、２年くらい前に、溝で網で魚取りをしていると、寛永通宝か何かの昔の硬化を掬い上げて、おそらく平田さんがいらっしゃる文化財センターにそれを持って行ったと思いますが、そこで「これ、な

		んぼくらいの価値があるん？」と聞いた覚えがあります。「１００円も価値ないよ」と言われて、残念そうに帰ってきていましたが、そんな光景が見られるところでございます。 　子どもが食用ガエルを捕まえる光景といったものは、東京のような都会では見られない光景だと思います。そうした光景の近くには「法隆寺まで徒歩１分」と書かれた看板があり、法隆寺の周辺は、生き物がたくさんいておりまして、メダカはお店で買わなくても法隆寺の近くの側溝を流れている水を網で掬うと見つかります。また、意外と地元の人には知らない人もいらっしゃるのですが、ホタルやサワガニがたくさんいます。そこまで山奥ではありませんが、自然豊かな環境です。 　法隆寺周辺の古い集落の道は、非常に細い道で、非常に入り組んでいます。観光客の方が、細い道を通ってきた車を避けて、「こんなところを車が通るの？」というような感じで、驚かれている光景が見られます。斑鳩の道の細さは、「斑鳩の道をバッタがひと跳びするほど細い」と言われており、古い集落は、本当に細い道ばかりです。そんな古い集落は、古い家並みが残っており、斑鳩にいらっしゃった際は、ぜひ、その周辺をブラブラと歩いていただくことをおすすめします。特に法隆寺の西側の集落である「西里（にしさと）」や、法隆寺の東側の集落である「東里（ひがしさと）」、といったところを歩いていただくと、良いのではないかと思います。「西里」や「東里」は、古土塀や板壁といったものが残っており、歴史を感じる家並みとなっています。 　私は、特に板壁に興味があり、「板壁が残る風景は、いい雰囲気だな。」と思います。「どんな釘が打ってあるのかな。」と思い、板壁に近づいてみると、釘は釘でも、「和釘」が打ってあると、「板壁として、高得点を付けられるな。」と思います。逆に、板壁に「洋釘」が打ってあると、「残念だな。もったいないな。」と思います。住んでいる人からすると、「放っておいてくれ。」という話ですが、“和釘ファン”としては、「放っておけないな。」と思います。ちなみに、「和釘」と「洋釘」の比較ですが、「洋釘」は、私たちが日常的によ

		く見る、一般的な釘です。対して「和釘」は、断面が四角くなっています。「和釘」も鉄でできていますが、鉄を鍛えて造るので、表面は当然錆びますが、錆が内部まで届きにくいという意味で、耐久性のある釘です。実際に釘を打つと、食いつきが良いらしく、「和釘」には、抜けにくいといった特徴があります。それに比べて、「洋釘」は、すぐ錆びて、すぐ抜けるように思います。 　そして実は、「洋釘」の歴史は浅く、明治３０年頃に日本に入ってきたものです。つまり、それまでは、「和釘」を使っていたわけです。一番古い、「飛鳥型の和釘」は、非常に大きいもので、法隆寺にも使われています。また、「和釘」は良い鉄の素材が使われていて、手間暇をかけて作られています。しかし、時代とともに需要がなくなり、作りやすくコストが安い「洋釘」に取って代わられてしまったのです。“外来種に追い詰められた絶滅危惧種”といったイメージでしょうか。ですから、「和釘」が打たれているのを発見すると、つい嬉しくなってしまいます。みなさんも、板壁を見つけたときは、ぜひ「和釘」を探してみると面白いのではないかと思います。 　さて、本日のテーマは「瓦が語る法隆寺の歴史」です。瓦を見てみると、さまざまな紋様があり、その紋様から当時の時代背景が見えてきたり、デザイン的な視点から見ても、図案として面白いなと思います。 　法隆寺は、別名「瓦の博物館」と言われており、各時代の瓦が揃っている寺で、法隆寺には多くの瓦が保管されています。全国には「瓦ファン／瓦マニア」もいて、「瓦マニア」からすると、聖地のようなところだと思います。軒丸瓦でも「法隆寺」と文字が入ったものや、ハスの花をモチーフにした蓮華のものなどさまざまな紋様があります。軒丸瓦で一般的な柄は、電電太鼓のような「三つ巴（みつどもえ）柄」ではないかと思います。いろんな説があるようですが、一説には、「三つ巴柄」は、水が渦を巻く姿に見えることから、火災除けの意味合いで使われ出したと言われている、と聞いたことがありますが、本当のところはどうなのでしょうか。

	平田	先ほど紹介がありましたように、私は、考古学の中でも瓦を中心としたテーマで研究をしています。 「三つ巴文」の瓦ですが、意味合いは諸説あります。「水の渦」を描いているという、火災除けの意味合いが有力な説ですが、古くは、弓を弾く際に腕に巻く「鞆（とも）」という道具があり、「鞆の絵」で「ともえ」が起源だと言う研究者もいます。また、太鼓に描かれている三つ巴から「雷」や「雲」を象徴しているという説、形が似ていることから「蛇」が起源であるという説、「勾玉」や「胎児」を象徴しているという説などさまざまな説があります。結論としては、意味合いはよくわからないというのが現状です。
	坪岡氏	法隆寺の境内には、土壁があり、その上の瓦に三つ巴がよく使われています。面白いのが、よく見ると全然そろっていないのです。大きさや、デザインもバラバラで、縁が太いものであったり、凹凸の数が違っていたりします。また、おたまじゃくしのような柄が、膨らんでいたり凹んでいたり、渦の巻き方が逆だったりと、「三つ巴柄」だけでもさまざまなデザインがあって、見ていて楽しいです。 ここで、平田さんに伺いたいのですが、右巻きと左巻きが半々くらいであるように思いますが、たとえば関西、関東で違うなど、どちらが主流、といった歴史的な意味合いはありますか。
	平田	「三つ巴文」は、江戸時代の大名の門に使われていたりしますが、なぜ、右巻きが採用されていたり、左巻きが採用されていたりするのか、実はよくわかっていません。家紋の研究者の中でも、そもそもどれが左巻きで、どれが右巻きかという定義がはっきりしません。しかし、「三つ巴文」は、周りに珠点がないものが古く、平安時代の京都の六勝寺などの寺が造られる頃に、盛んに造られ始めました。法隆寺でも、古くは鎌倉時代の初め頃には、「三つ巴文」の瓦が使われ始めました。「三つ巴文」の中心である、おたまじゃくしの頭のような丸い部分がくっついているものが古いタイプのものです。しかも、おたまじゃくしの尾っぽのような部分が長いものが古いタイプものです。

		時が経つにつれ、おたまじゃくしの頭のような丸い部分が、丸く大きくなっていきました。そういったことから、形やデザインの違いが生まれ、私たちは、「三つ巴文」の特徴から、この瓦がいつ作られたものか判断する「編年作業」をしています。なかなか難しい作業ですが、法隆寺の瓦には製造年代が書かれている例があって、そういったものを使いながら年代を判断しています。
	坪岡氏	石畳のところだけを歩くのは勿体なく、土壁沿いに瓦を見ながら歩いていただくと、小さな発見があると思いますので、お勧めしたいと思います。運が良ければ、「三つ巴柄」の瓦に紛れて、２種類の別の柄の瓦も発見できます。 まず１つ目は、家紋のような紋様です。この紋様は、まさしく家紋でありまして、「九つ目結文」と言います。ひし形が９個並んでいます。徳川綱吉の母である桂昌院の家紋です。桂昌院は通称「お玉さん」と言われており、八百屋の娘から徳川家光の側室になり、側室の身でありながら、将来、将軍となる徳川綱吉を産んだことで、大出世していきました。このお玉さんのシンデレラストーリーから、「玉の輿」という言葉が生まれたそうです。桂昌院は、奈良の寺院に随分寄進されており、法隆寺の元禄の大修理の頃には、多額の寄進をされています。桂昌院や徳川家は、法隆寺にとってビッグスポンサーであり、「九つ目結文」の瓦があるのも、瓦にスポンサーロゴが入っているようなものだと思います。 もう一つは、葵の御紋が入っている丸瓦ですが、実際普段我々が入ることができない所にあります。実は、私も見たことがないので、一度見てみたいなと思っています。 こうした家紋入りの瓦を見て、長い歴史の中で、法隆寺は時勢を見極めながら、言い方は良くないですが、うまく立ち回ってこられたのだろうなと思います。徳川家の前は豊臣家と関係がありました。例えば、慶長の大修理の際は、豊臣秀頼のおかげで大掛かりな修理ができています。豊臣秀頼のおかげと言っても、~~徳川家が~~徳川家が豊臣家にお金を使わせるための策略だという説もありますが、いずれにせよ、

		法隆寺は、豊臣家にそれなりの恩があることも事実です。しかし、いよいよ豊臣家と徳川家が衝突するタイミングになると、今までお世話になっていた豊臣家ではなく、勝機のありそうな徳川家の味方についたのです。後に、豊臣家に味方しなかったということで、村を焼かれるなどの報復もあったようですが、法隆寺は無事だったようです。 　さらにもう少し前の時代の、織田信長の時代にも、苦労されていたようです。この時代は「禁制」というものを発行してもらっていたようで、「禁制」とは簡単に言うと「この寺に危害を加えてはいけません」という書類のようなもので、法隆寺はこれを立札に掲げて示すことで、狼藉や強盗の被害に遭わないよう寺を守ってきた、という歴史があります。「禁制」を発行してもらうには、それなりの費用が掛かり、お金を工面するのも大変だったと思います。 　こうした歴史を見ていると、現在、世界遺産の法隆寺があるのは、地震や火災などの大きな被害を受けなかったことよりも、法隆寺の時勢を見極める力があったことが大きいのだと思います。「九つ目結文」の柄の瓦を見たときには、このような歴史的背景を思い出してみてください。 　さて、先ほど、土塀に載っている瓦を見て歩くと面白い、というお話をいたしました。今度は、屋根に乗っている「留蓋瓦（とめぶたがわら）」のお話をしたいと思います。「留蓋瓦」は、デザインが豊富な瓦です。「留蓋瓦」は、瓦と瓦のつなぎ目から、雨水が侵入するのを防ぐためのものです。もともとはお椀をひっくり返したような半球型のものでしたが、どんどんデザインが造形的になっていき、宝珠、桃と蓮、波とうさぎ、獅子、菊など種類も豊富です。獅子については、法隆寺の「留蓋瓦」には、なぜかあまりカッコイイ獅子ではなく、ちっと間抜けな顔をした獅子や、小さく痩せた獅子が多いように思います。菊についても、複雑な造形のものや、立体的なものなど、さまざまなデザインがあります。よく使われる波のモチーフには、水に関係するものということで、火災除けの意味合いがあったのかもしれません。珍しいタイプのものでは、波と紅葉の組み合わせのデザインは、竜田川がテーマのようにも感じます。また亀がデザインされたものも

		あり、これは少し見つけにくいところにあり、レアな「留蓋瓦」なので、ぜひみなさん探してみてください。これら以外にも、さまざまなデザインがあるので、お気に入りを探して歩いてみても面白いと思います。 　法隆寺だけでなく、周辺の民家の瓦にも「鍾馗（しょうき）さん」や、「大黒さん」がかたどられたものがありますが、最近はこういった瓦も少なくなってきたように感じます。平田さんにお伺いしたいのですが、いつ頃からこのようなものが載るようになったのでしょう。
	平田	「留蓋瓦」は、先ほど坪岡さんからご説明があったように、塀の角の部分などに、雨漏りを防ぐ雨仕舞として載せるものです。シンプルなものから、だんだん造形をもったものができました。こうした瓦を載せることが流行ったのは、江戸時代の末くらいが最初だと思います。みなさん、「鍾馗さん」はご存知でしょうか。「鍾馗さん」を建物に飾ることは、関東では馴染みがないかもしれません。畿内の方では、よく「鍾馗さん」を建物に載せます。「鍾馗さん」を建物に乗せるようになった伝承としては、京都の三条に立派な鬼瓦がある家があり、その向かいの家の方が病に伏してしまいました。原因を探ると「鬼瓦」の鬼の霊力のせいではないかとのことで、これを跳ね返すために「鍾馗さん」を祀ると、病が治ったということが始まりといわれています。「鬼瓦」の鬼の霊力に対する魔除けのようなものとして、江戸時代の後半から明治・大正時代にかけて流行しました。斑鳩では、最近の建物でも「鍾馗さん」を「留蓋瓦」として使用している例が見られます。
	坪岡氏	どうしても作る側に立ってものを見てしまう癖がありますが、もし私が、毎日同じ瓦を造っていたら飽きますし、「留蓋瓦」や「鬼瓦」で自分の個性を出せると楽しいだろうと思います。もともとは機能を満たすためのシンプルなものだったのが、装飾的・造形的に変化していったのは、職人の表現の場、腕の見せ所だったのではないかなと思います。ですから、職人がどんな思いでこれを作ったのかな、と想像したりします。

		実は「鬼瓦」も飛鳥時代、奈良時代から変化しています。通常、私たちが「鬼瓦」と言えば、怖そうな鬼が立体的に描かれている瓦をイメージします。しかし、ヘアスタイルが特徴的なものなど、「鬼瓦」もさまざまな表情のものがあります。世の中には「鬼瓦好き」の方もたくさんいらっしゃいます。法隆寺にもさまざまな種類の「鬼瓦」があります。例えば、「西円堂（八角堂）」にある「鬼瓦」は、太陽と月が描かれています。昔の法隆寺の若草伽藍の「鬼瓦」のデザインは、鬼でなく、蓮の花をモチーフにしており、お洒落な図案だと思います。これが復元されたものが、「大宝蔵院」の屋根の上に載っています。鬼も良いですが、図形的な瓦も新鮮に感じます。蓮の花をモチーフにした「鬼瓦」の破片が出土したこともありましたが、平田さんは立ち会われましたか。
	平田	直接発掘をしていませんが、実物を見たことはあります。これが出土したのは、境内の中を掘った、昭和１４年、４３、４４年の調査です。鬼が載っていないのになぜ「鬼瓦」かというと、もともとは建物の上に乗っている、大棟などの先端に雨仕舞としてつけていたものに、だんだん装飾がされていって「鬼瓦」になったのです。「鬼板」などと呼んだりもします。先ほど坪岡さんからご説明があった、蓮の花をモチーフにした「鬼瓦」については、蓮の華の文様が、「単弁」の「八弁」で作られています。弁の先端に針金状の線が入っていますが、これは、コンパスを使って円を描き、八等分している痕跡です。デザイン性に非常に優れており、日本で最古の「鬼瓦」と考えられています。これに似た「鬼瓦」としては、「法隆寺若草伽藍」が完成する少し前の頃の、百済の国にある「扶余（フヨ／プヨ）」の「扶蘇山（ふそさんじょう）」の中にあるお寺に使われていたものがあります。その後、「山村廃寺」や「奥山久米寺」の蓮華文、平城宮では三重の弧文など、さまざまな文様の「鬼板」が作られ、奈良時代になると皆さんがご存知の「鬼瓦」の形となり、鎌倉時代は立体的な「鬼瓦」が登場しました。主に魔除けの意味合いを持った瓦です。

	坪岡氏	「鬼瓦」も元は蓮の華がモチーフになっていましたが、「丸瓦」も蓮の花がモチーフになっているものがあり、「蓮華紋の瓦」といいます。「蓮華紋の瓦」は、法隆寺の中門や五重塔、金堂に使われています。この瓦は、飛鳥時代の前期の瓦はシンプルな紋様ですが、後期に複雑な紋様に変わっていきます。 こうしたデザインの変化を見ていると、「鬼瓦」も「丸瓦」も、初期型のシンプルなデザインの方が、好感が持てる気がします。瓦をモチーフにしたお土産は、複雑なデザインの方がよく採用されており、例えば、奈良県内でも小皿や和菓子などがあります。もし、私が斑鳩で、「蓮華紋」をモチーフにしたものを考えるとするならば、初期型のデザインを使いたいなと思います。初期型のデザインはさまになります。手ぬぐいや和傘、洋傘、「蓮華紋」デザインのカレンダーなんかは、いかがしょう。特にカレンダーは、近いうちに商品化したいなと思っています。何とかして、法隆寺の初期型の「蓮華紋」の魅力を伝えたいと思っています。 法隆寺の「蓮華紋」については、実は花弁が九弁あり、これは法隆寺オリジナルのもので、法隆寺で使われている「蓮華紋」の初期型の特徴です。瓦が好きな方がみると、「おっ、これは」となると思いますし、一般の人でも「きれいだな」と思ってもらえるのではないでしょうか。 瓦の色についてですが、今は「いぶし銀」ですね。当時の瓦の色はどんな色だったのでしょう。
	平田	現在、レプリカが造られている瓦では、「法隆寺若草伽藍」で使われている一番古いタイプのもので、金堂で使われていた九弁の「蓮華紋」の瓦があります。また日本で初めて「軒平瓦（のきひらがわら）」を開発したのが法隆寺と言われており、手彫りの「忍冬唐草文（にんどうからくさもん）」の文様の「軒平瓦」のレプリカも造られています。その頃の瓦の窯は、見つかっていません。しかし、いわゆる「法隆寺式」と言われている、７世紀後半ごろの、法隆寺再建の頃の瓦については、わかってきているところがあります。どこで焼いているの

		か調査がされていませんが、それに近い頃の瓦を見ますと、この頃「いぶし銀」の瓦はなかったようです。古い瓦は、青っぽい灰色の青灰色（せいかいしょく）、橙色、茶色が多く、その色のまま葺いていたようです。瓦がまとまって崩れた状態で発掘されることがありますが、煤（すす）で燻（いぶ）した瓦はあまり載っていません。飛鳥時代・白鳳時代の瓦は、燻した瓦もありましたが、燻すことにあまりこだわりがなかったようです。奈良時代に建てられた平城宮や上宮（かみや）遺跡などでは、燻した瓦が載っていました。それがだんだん黒色や灰色に統一されてきたのだと思います。
	坪岡氏	ということは、当時瓦は、今、私たちが見ているような色ではなかった、ということですね。
	平田	そうですね。佐賀県の肥前国庁跡などは、最近復元されたものですが、さまざまな色の瓦が葺かれていて、千鳥柄のようになっていますね。
	坪岡氏	ここからは、瓦とは話が外れるのですが、日本の初期型の「邪鬼」も見ていただきたいと思います。「邪鬼」といえば、「四天王」に踏まれ、痛々しい姿のものが一般的です。見ていてかわいそうに思ったりもします。東大寺の国宝「四天王像」も、その下に苦しそうな「邪鬼」がいます。一方、法隆寺ですが、「四天王」は棒立ち、その下の「邪鬼」も苦しんだ表情ではなく、乗り物のように伏せをしていて、愛嬌があり、魅力的に感じます。法隆寺のものも国宝です。法隆寺の「邪気」は、ほかには見られない、人間のような姿をした、コミカルな印象です。東大寺のものは、作品としてのレベルの高さを感じますが、法隆寺の方が魅力的に映ります。ですから、私は、法隆寺の「邪気」をスケッチしたりしています。 また「鳳凰」も、法隆寺にある、いわゆる「初期型の鳳凰」と、他事例を比べてみましょう。平等院鳳凰堂の「鳳凰」は、一万円札に描かれていて、有名ですよね。立派な「鳳凰」だと思いますが、私が点

		数をつけるとしたら、９５点くらいかなと思います。金閣寺の「鳳凰」も立派だと思います。しかし一方で、法隆寺の「鳳凰」ですが、ほかの「鳳凰」と全く違います。非常にかっこいいなと思います。目がなく、鱗のような体毛の表現はなく、単純化された「鳳凰」だと思います。デザイン的に見ても、ロボットのような印象はありますが、スタイリッシュで面白いです。もしかしたら、この頃は、「鳳凰」のイメージが固まっていなかったのではないかなと思っています。法隆寺では、金堂の天蓋で、「鳳凰」を見ることができます。夢殿に入るところの、手水社でも「鳳凰」をみることができます。 　車もそうですが、やはり初代がかっこいいように思います。マイナーチェンジやモデルチェンジすると、造形がだんだん複雑になり、性能もより立派になっていきますが、初代の魅力を越えられないように思います。これと同じように、平等院の「鳳凰」も立派なのですが、私は、法隆寺の「鳳凰」の方が好きです。 　あまりにもかっこいいなと思うので、法隆寺の「鳳凰」をスケッチしてみました。色を付けて、絵葉書にしてもいいのではないかと思います。 　ぜひ一度、法隆寺にお越しになった際は、ご覧になってみてください。 　次に、「金剛力士像」について、法隆寺のものと、ほかのものを比べてみましょう。法隆寺の「金剛力士像」は国の重要文化財です。東大寺の「金剛力士像」は国宝です。「金剛力士像」についても、私は、法隆寺のものの方が良いなと思います。重要文化財であるということが良いなと思います。なぜかというと、国宝になると、金網がついたりして、像がよく見えません。近年、油をかけるなどの被害があり、管理が難しいところではありますが、強化ガラスを使うなど、もう少し見やすく工夫してほしいところです。 　ということで、法隆寺の「仁王さん（金剛力士像）」は、比較的近い距離で見ることができ、お勧めです。 　私は、特に「金剛力士像」の吽形（うんぎょう）が好きで、色が剥げているのだと思いますが、顔が半分黒く、半分赤いのです。そうい

		うところが、魅力的に思います。これも、少しかっこよく描けば、たくさんの人に、興味を持っていただけるのではないかと思います。 　歴史というものを、うまくデザインしていくことで、奈良の魅力、斑鳩の魅力を、みなさんにお伝えらできたらと思っています。 　例えば、「聖徳太子」は、多くの人が、お札に印刷されたような姿をイメージするのではないでしょうか。実際、「聖徳太子」の像の前に立つと、背筋が伸びるような厳しい表情をされています。最近、ゆるキャラブームですが、どこか厳しさを感じる表情の方が、魅力的ではないでしょうか。 　「聖徳太子」が作った「十七条憲法」については、中身まで知っている人は少ないのではないでしょうか。これをデザインをすることで、みなさんにわかりやすく伝えたいと、「十七条憲法」を現代語訳して、一言で表した栞を作ってみました。これがなかなか好評で、一言にしてみると、意外と難しいことを言っていません。現代にも通じるような、人間の心構えのようなことが書かれています。第一条の「和をもって貴しとなす」は、「和は何よりも大切です」とか、ほかの条では「嫉妬の気持ちを持ってはいけません」、「早起きしてしっかり働きなさい」、「賄賂に騙されてはいけない」などとなっています。役人向けに書かれているものなので、例えば、「時期をよく見計らいなさい」というのは、農民を使うにしても、刈り入れ時をみて手伝ってもらいなさい、という意味で言っているのです。この栞をプレゼントのために買うにしても、自分に買うにしても、「どの言葉がいいかな」と楽しんでもらえています。 　栞に描いている絵をモチーフにして、ラインスタンプも作ってみました。 　「起き上がりこぼし」を作ろうかなとも、思ったこともあります。 　また、みなさんにお配りしている、『わたしだけの斑鳩時間』は、斑鳩の郷土史研究家の蔭山精一（かげやませいいち）さんと一緒に作成したものです。一枚の紙に斑鳩の見どころや歴史を、２～３ピックアップして紹介しています。一冊の本を持って観光するのは、気持ち的に重たいものです。そうではなく、「一枚の紙を持って、その場所

		に訪れる」というような楽しみ方をしてほしいと、考案しました。イベントや限られた場所で販売ですが、バスガイドの方に好評です。また、地元の小中学生が、夏休みの宿題に活用しようと買っていかれます。そのような話を聞くと、この『わたしだけの斑鳩時間』が、斑鳩のお役にたてているような気がして、うれしく思います。 　残念ながら、蔭山さんは去年お亡くなりになりましたが、自分なりの形で蔭山さんの思いを引き継いで、『わたしだけの斑鳩時間』の制作を続けていきたいと思っています。 　さて、奈良は「土を掘ったら土器にあたる」と言われ、古墳も多いです。斑鳩の藤ノ木古墳も、実際に埋葬されていた装飾品をみると、魅力的なものがあります。例えば、魚をモチーフにした飾りもの、靴にも魚の飾りがついており、デザイン的にも面白いです。 　こうした埋蔵品にスポットを当てて、デザインを考えるのも面白いのではないかと思います。 　また、藤ノ木古墳の石棺は赤く、特徴的です。 　平田さん、藤ノ木古墳の発掘当時に、何か面白いことはありましたか。
	平田	藤ノ木古墳ですが、１９８５年（昭和６０年）、周囲に住宅が建ち始めたことから、斑鳩町で学術調査を始めました。そうすると、藤ノ木古墳から、朱塗りの「家形石棺」が見つかり、センセーショナルな報道発表がされました。石棺の形が家のようなので、「家形石棺」といいますが、朱塗りが全部残っていたのは、すごい出来事でした。魔除けを「辟邪（へきじゃ）」といいますが、朱塗りには、「邪なるものを寄せ付けない」という意味が、強くあったのではないかと思います。成分を見ると、「水銀朱」というものを使っていて、水銀を含む有毒なもので、小動物や昆虫を寄せ付けません。こうしたことから、朱塗りの意味が、中国から伝わってきて、日本でも古墳の石室や石棺に塗られたりしました。 　そして、藤ノ木古墳は、盗みに入られていない未盗掘の古墳だったため、朱がきれいに残っていたようです。盗掘された古墳では、こう

15：00		はいきません。風化も進み、朱色は断片的に残っている程度になっています。 　１９８８年（昭和６３年）に、第３次調査で石棺を調査したときに、魚の形をした飾り、「魚佩（ぎょはい）」が見つかりました。見つかった位置が、「大刀」の横からだったので、「大刀」の飾りだったと思われます。昔は、腰にぶら下げていた「腰佩（ようはい）」という説もありましたが、藤ノ木古墳での発掘調査によって、大刀飾りだったということが分かりました。伊勢神宮の神宝（じんぼう）である、「玉纏御太刀（たままきのたち）」にも魚の飾りがついていますが、そういったものの源流が、藤ノ木古墳の魚の飾りではないかと考えらます。しかし、魚の飾りがつけられている理由については、決まった説はありません。よく言われているのは、「出世魚」という言葉がありますが、そこからきているのではないかという説です。刀は当時、権力者しか持てないので、そういった「出世」のような願いが込められている、といった考え方もあります。単なる火災除けのような、何らかを避ける意味があったという説もあります。 　また、履の丸い部分の「歩揺」の中に、魚の飾りがちりばめられていたりします。奈良県の大和高田市の古墳からも、魚の形をしたものが見つかっていて、履の中に魚の飾りを入れるという、一つのルールがあったようで、背景や思想についてはわかっていません。
	坪岡氏	「赤い石棺」で思い出しましたが、法輪寺の「鴟尾（しび）」が、もともとは赤かったと聞いています。「赤い鴟尾」は、全国的に珍しいものなのでしょうか。
	平田氏	そうですね。屋根の頂上にあるのが大棟ですが、その両サイドを飾っているている部分、お城でいう「しゃちほこ」が載っている部分についているのが「鴟尾瓦」です。法輪寺の「鴟尾瓦」の部品を、私が発掘調査したところ、真っ赤な状態の破片を見つかったのです。現在、国の重要文化財となっている、法輪寺の「鴟尾瓦」に関しても、よくみるとぽつぽつと赤い色が見えたので、もともと赤かったというのが

		分かりました。そのとき全国を調べると、赤い「鴟尾瓦」の事例はなかったので、大変珍しいと思います。墨で塗ったような黒い「鴟尾瓦」は、唐招提寺にあり、その後、金色を貼っています。「鴟尾瓦」を飾りたてるということは、昔からあったのかもしれませんが、赤く塗られている事例は、現在、法輪寺しかないと思います。
	坪岡氏	今後、法隆寺などのお寺や、歴史的なことだけでなく、考古学的なことを、より魅力的に伝えられる方法を探ろうかと思っています。 最後になりますが、いろいろお話させていただきましたが、奈良県はどちらかというと、他県と違って商売っ気がないと言われます。例えば、まだ観光客がいるのに店を閉める、かきいれ時なのに店が開いていない、といったことがあります。法隆寺の参道も、今年のお正月も開いてる店もありましたが、閉まっている店もありました。京都だとありえません。それがまた奈良県ののんびりした特徴で、関西の割にのんびりしています。それはそれで奈良県らしくて良しとして、奈良県を魅力的に感じてもらえるように、もっと歴史を面白く、おしゃれに伝えることをしていきたいと思っています。法隆寺をはじめ斑鳩には、古いものがたくさん残っていて、古いものがかっこいいと思います。みなさんも法隆寺に一度は訪れたことはあるかもしれませんが、古いもの、初期のものが残っている斑鳩、そんな目線で、法隆寺・斑鳩に遊びに来ていただきたいと思います。 本日はありがとうございました。
15：00	藤江	みなさま、斑鳩の里の魅力を感じていただけましたでしょうか。これをもちまして、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録２５周年記念セミナー「聖徳太子の面影に会う斑鳩」の第４回を終了させていただきます。 出口でアンケートを回収させていただきますので、ご協力をお願いいたします。また、会場の後方では斑鳩町の観光パンフレットを設置させていただいております。どうぞお持ち帰りくださいませ。 本日はご来場いただき、ありがとうございました。

15：00		～閉会～